立命館地理学　第19号（2007）43～55

明治期以降における諸営業形態からみた旧宿場町の変容

――旧京街道枚方宿の岡村を例として――

一　色　範　子

Ⅰ．はじめに

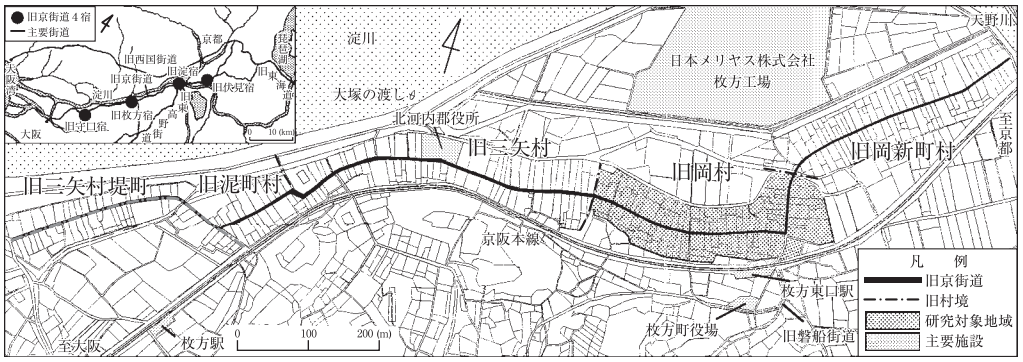
従来の宿場町[1]に関する研究は、おもに歴史学と地理学において進められてきた[2]。ただし、近世に比べて近代を対象としたものは多くない。それは、幕藩体制の崩壊により宿駅機能[3]を喪失したため、交通集落としての宿場町の衰退に研究者は興味を必ずしも覚えなかったからと思われる。そのなかで歴史地理学では、比留木広明・桑原公徳[4]が、明治期以降における暗越奈良街道松原宿を例に、従来の宿場町研究が形態的側面の分析に欠けていることを指摘した。朝比奈太郎[5]は、形態的側面と機能的側面からの追究が必要であると述べている。後者には宿駅機能とその補完機能としての流通機能が考えられる[6]。

しかしながら、宿内における物資の生産および流通の役割を担ってきた商工人の実態については、あまりふれられてこなかった。宿場町の主たる機能である宿駅機能にばかり注目されるため、宿場町の盛衰について、とくに旅籠屋やそれに従事する者の増減などから考察されてきたのである。

また、複数の藩制村から成立していた宿場町のうち1か村に焦点をあて、近代以降の変容を追った研究はみられない。それは、宿駅制度崩壊後、宿場町全体が衰退するものと捉えられてきたことが前提にあるためであろう。個々の藩制村に着目した場合、宿駅機能をとくに付与された藩制村と、そうでない藩制村が存在する。このうち後者について、前者と同様に宿駅制度廃止の影響を受けたのか否かを考察するまでには至っていないのである。

Ⅱ．研究目的と研究方法

そこで本稿では、歴史地理学的視点から、宿駅制度廃止以降における旧宿場町の変容を商人の諸営業形態[7]から明らかにする。なかでも、宿場町を構成していた複数の藩制村のうち1か村に焦点をあて、社会経済的背景をふまえながら検討する。その事例として、多村一宿型の宿場町であった旧京街道枚方宿の岡村を取りあげる。江戸初期に東海道の延長として整備された京街道[8]筋には、伏見・淀・枚方・守口宿の4宿が存在した（第1図）。このうち枚方宿は、岡新町村・岡村・三矢村・泥町村の4か村により成立していた（第1表）。また、淀川の存在と相まって、同宿は水陸交通の中継地としての役割をなしていた。ただし、陸上交通は上りと下りで極端に不均衡をきたし、枚方宿は「片宿」とよばれていた[9]。街道筋には、いくつかの旅籠屋が分布し、なかでも上ノ町・中ノ町・地下町・堤町の4町からなる三矢村には、宿場町の中心的な施設である本陣や脇本陣・問



第１図　大正中期における旧枚方宿とその周辺

注）図中の旧村境は一部不明である。
（17）における史料⑤・枚方市教育委員会編『旧枚方宿の町家と町並』、枚方市教育委員会、1985、4 ～ 5 頁・中島三佳『東海道枚方宿と淀川』、自費出版、2003、27 ～ 28 頁をもとに作成）

屋場などが存在した。

このような枚方宿に関する研究には、黒羽兵治郎[10]や福山　昭・山口尚子[11]、中島三佳[12]、屋久健二[13]、矢内　昭[14]などが挙げられる。歴史学的研究が多くを占め、これらの報告でも、宿駅制度廃止以降における旧枚方宿の変容について地域単位で述べられることはなかった。

三矢村・泥町村と岡新町村・岡村は、同じ宿内にありながら生業を全く異にするものであった。それは、岡新町村・岡村の２か村の商業従事者はわずかで、そのほとんどが農業従事者であり、三矢村・泥町村の２か村のそれとは対照的なものであった。さらに営業形態についてみると、岡村においては岡新町村とは異なり多様な諸営業がみられた。天保期（1830 ～ 1844 年）の岡村では、京街道筋において 17 戸が諸営業に携わっていた[15]。第 2 表は、宿駅制度廃止以前における岡村と岡新町村の営業種を示したものである。岡村では古物小売業に携わる者が大半を占めるが、岡新町村では宿泊施設業に携わる者が多かった。江戸中期以降における枚方宿は、脱農化の傾向のなかで零細な諸営業に従事して生計を立てる者が数多く存在したと思われる。しかし、岡村にみられた諸営業は、宿内の消費需要を賄うために展開されたようである[16]。

研究方法として、まず宿駅制度廃止以降における岡村の商人分布を把握するために、地籍図や旧土地台帳などの史料[17]を用い、旧京街道筋を中心に景観復原する。対象時期については、①明治前期、②明治後期、③大正～昭和初期の３時期に区分する[18]。①については、宿駅制度廃止となった明治５（1872）年から、旧土地台帳の作成される前年である同 22（1889）年までを、②については、京阪電気鉄道の開通にともない、枚方東口駅の開設した明治 43（1910）年に着目し、旧土地台帳の作成された同 23（1890）年頃から同 45（1912）年頃までを、そして③については、大正元（1912）年から枚方大橋の開通した昭和 5（1930）年までを検討する。この大橋の開通によって淀川右岸とも交流が盛んになり、旧枚方宿の特徴が失われると考えられるためである。次に、岡村における商人の営業形態について、業種の数やその内容の変化を考察す

第１表　京街道枚方宿およびその周辺に関する遷移

年	枚方宿とその周辺事項	社会経済的事項
元和２（1616）	この頃岡新町村・岡村・三矢村・泥町村の４か村を枚方宿に指定	
寛永 12（1635）		参勤交代制確立
元禄７（1694）	枚方宿助郷に 28 か村指定	
明治３（1870）	枚方宿本陣廃止	駅法改正
明治４（1871）		廃藩置県
明治５（1872）		宿駅制（伝馬所・助郷）廃止
明治６（1873）	枚方陸運会社、岡新町村に設立	
明治 21（1888）	枚方郡役所、三矢村本陣跡に新築	
明治 22（1889）	現枚方市域内に１町９村誕生	町村制施行
	枚方町役場、泥町村に開設	
明治 27（1894）		日清戦争勃発
明治 29（1896）	茨田・交野・讃良の３郡廃止、北河内郡設置	
明治 37（1904）		日露戦争勃発
明治 43（1910）	京阪電鉄開通、枚方・枚方東口駅などの各駅設置	
大正３（1914）	枚方町役場、旧岡村に移転	第一次世界大戦勃発
大正９（1920）	旧岡村にて日本メリヤス枚方工場操業開始	
昭和５（1930）	枚方東口市場、旧岡村に開設	
	枚方大橋開通	

（枚方市史編纂委員会編『枚方市史』、第 12 巻、枚方市、1986、193 ～ 268 頁および枚方市史編纂委員会編『郷土枚方の歴史』、枚方市、2002、309 ～ 312 頁をもとに作成）

第２表　宿駅制度廃止以前の岡村と岡新町村における諸営業

業種	岡村	岡新町村
	（戸）	
古物小売業	32	8
食料品小売業	14	5
手工業	11	2
宿泊施設業	11	12
日用品小売業	10	10
その他	6	0
計	84	37

古物小売業：古着・古道具など
食料品小売業：醤油・味噌など
手工業：酢製造・染物など
宿泊施設業：宿屋・旅籠など
日用品小業：荒物・金物など
その他：髪結・飛脚など
注）岡村は慶応（1867）年の状況である。また戸数は延べ戸数を示し、実際は 76 戸である。
岡新町村は元文２（1737）年の状況である。
（枚方市史編纂委員会編『枚方市史』、第３巻、枚方市、1977、457 ～ 458 頁をもとに作成）

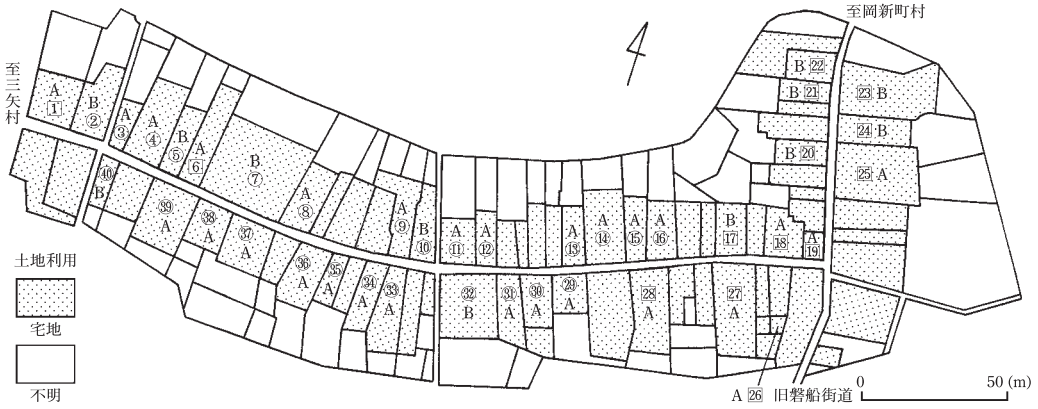
る。なお、史料の記載内容の精度を高めるため、あるいは史料に記載されていない業種を確認するため聞き取り調査を行なった。

Ⅲ．明治期における岡村の諸営業形態

1．明治前期における岡村の諸営業形態

明治５（1872）年に宿駅制度の廃止を受けた枚方宿は、翌６（1873）年における枚方陸運会社[19]の設立（第１表）とともに、旧来の陸上交通制度は姿を消した。しかし、当時における貨物輸送の主要な手段は、依然として淀川を利用した水上交通であり、陸上交通の本格的な展開はまだみられなかった[20]。

第２図は、旧京街道筋に限った明治前期における岡村の景観復原図である。宅地は街道に沿い、その背後には田畑が分布していたと



A: 当期に初出　B: 天保期より存在

第 2 図　明治前期における岡村の商人分布

注）図中の番号は第 3 表に対応する。また□印に表示される者の営業地は不確かである。

（17）における史料①～⑫および聞き取り調査をもとに作成）

思われる[21]。宅地で示される大半の箇所は、何らかの営業に携わっており、それは 40 名を数えた（第 3 表）。商人の構成をみると、大半は明治前期の各史料に初出の者である（A）。㊱のように、当初は三矢村にいたが、明治 17（1884）年から岡村で商業を営みたい[22]という者も存在する。また、天保期より存在する商人（B）は 12 名である。彼らの営業地は旧京街道筋に面していた。

日用品小売業や食料品小売業をはじめ、明治前期の業種は、おおまかには 9 業種に類別され、この数は江戸末期よりも多い（第 2 表）。その内容をみると、江戸末期にみられた業種のいくつかがうかがえる。たとえば髪結業は江戸末期にもみられる一方、人力車夫は当期に初見の業種である。また江戸末期には、古物小売業に携わる者が最多であった。しかし明治前期では、日用品小売業および食料品小売業に携わる者が最も多い（第 3 表）。

商人は最大 4 業種に携わっており、なかでも 2 ～ 3 業種を兼ねる者が多い。これより、商人は複数の業種に携わりながら営業種を検討している様子がうかがえる。たとえば、⑤は日用品小売業のみに携わっている一方、⑨は日用品・古物・衣料品小売業、そして手工業の 4 業種に携わっている。このように、商人の間で営業種数にばらつきがみられるのが当期における特徴である。

以上より、当期においては日用品や食料品小売業ならびに古物小売業を含む兼業種の形態が多くみられた。さらに、髪結業や宿駅制度廃止の影響を受けたと考えられる宿泊施設業が少なからず残存する一方、人力車夫のように、社会経済的背景のもとに新しい業種も混交した営業形態がみられた。

2. 明治後期における旧岡村の諸営業形態

明治 22（1889）年の町村制施行により、旧枚方宿の 4 か村は伊加賀村および枚方村の 2 か村を併せて枚方町となった[23]（第 1 表）。また、明治 29（1896）年の北河内郡の設置にともない、それまで旧三矢村の本陣跡に置かれていた茨田交野讃良郡役所は、北河内郡役

第 3 表　明治前期における岡村の諸営業形態

番号	営業人名	商店名（屋号）	A	B	業種								
					日	食	古	他	工	衣	仲	宿	漁
1	桑山直七	—	○		○				○				
②	—	布甚		○	○								
③	門川利平	—	○			○		○					
④	宮南加屋	—	○		○	○							
⑤	阪本茂平	団扇屋		○	○								
6	林　定吉	—	○			○			○				
⑦	西村善八	金善？		○	○						○		
⑧	芦田藤七	—	○		○	○							
⑨	藤田杢三郎	—	○		○		○		○	○			
⑩	西崎喜代	はんど屋		○		○		○	○				
⑪	松本半治郎	—	○									○	
⑫	井上忠治郎	—	○					○					
⑬	田村亀吉	—	○		○	○	○						
⑭	西川吉次郎	—	○			○		○	○				
⑮	白井安治郎	—	○		○	○	○	○					
⑯	田中伊太郎	—	○		○	○	○				○		
17	藤田六三郎	綛六		○	●		○						
18	上林伊平	—	○		○					○			
19	伊藤為吉	—	○		○	○	○						
20	角野長次郎	角長		○	○	○	○						
21	吉村彦七	樽屋？		○	○			○	○				
22	阪本平三郎	—		○						●			
23	乾　庄十郎	幡庄？		○		○	○				○		
24	玉井又平治	茜又？		○	○	○							
25	中嶋松次郎	—	○			○	○						
26	中嶋茂平	—	○			○							
27	内田　仲	—	○		○		○			○			
28	林　重太郎	—	○				○			○			
㉙	藤田とき	—	○		○	○	○			○			
㉚	田中利八	—	○		○	○		○				○	
㉛	田中岩治郎	—	○		○	○	○						
㉜	今西孝三郎	今幸		○	○								
㉝	泉谷保平	—	○			○			○				
㉞	田中治三郎	—	○		○				○	○			○
㉟	山田利平	—	○		○	○	○						
㊱	狩野寅吉	—	○			○	○					○	
㊲	田中　岩	—	○			○							
㊳	大村由松	—	○			○		○					
㊴	内田庄造	—	○		○	○	○	○					
㊵	柴田茂八	柴茂		○	○	○		○	○				
計			28	12	25	25	16	10	9	7	3	3	1

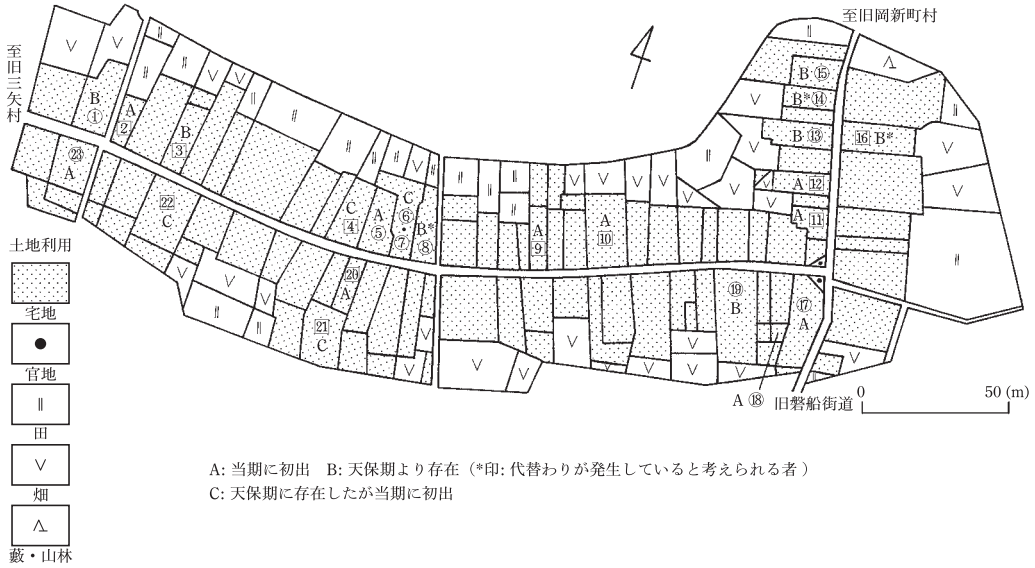
A：当期に初出　B：天保期より存在

業種における日：日用品小売業（小間物・荒物など）　食：食料品小売業（米・醤油など）
古：古物小売業（古着・古道具など）　他：その他（人力車・髪結など）
工：手工業（酢醸造・染物など）　衣：衣料品小売業（呉服・反物など）
仲：仲買業（綿・材木など）　宿：宿泊施設業（宿屋・旅籠屋）　漁：漁業

○印：史料　●印：聞き取りによる

注）表中の番号は第 2 図に対応する。また□印に示される者の営業地は不確かである。

（17）における史料⑦～⑫および聞き取り調査をもとに作成）



第 3 図　　明治後期における旧岡村の商人分布
注）図中の番号は第 4 表に対応する。また□印に表示される者の営業地は不確かである。
（17）における史料②～⑥・⑬～⑮および聞き取り調査をもとに作成）

所となった。さらに、明治 43（1910）年には、旧岡村に京阪枚方東口駅、旧伊加賀村には枚方駅が開設した（第 1 図）。

第 3 図は、明治後期における旧岡村の景観復原図である。宅地は明治前期に比べ若干増加し、分筆も数箇所にみられるものの、全体的に大きな変化はない。当期に確認できる 23 名の商人の構成をみると、代替わりも含み天保期より存在する者（B）は 8 名であるのに対し、①や⑤をはじめ当期に初出の者（A）は 10 名となっている（第 4 表）。また4や⑥など、天保期には存在したが当期に初出の者（C）は 4 名である。彼らは、おそらく明治前期においても岡村で営業活動を行なっていたと推察される。一方、（B）は当期においても継続して営業を行なっている。ただし、前節で確認したような明治前期の史料に初出の商人は、当期において確認できなかった。

業種については、明治前期にみられた宿泊施設業や仲買業、そして漁業や髪結業など「その他」の業種はみられない。全 6 業種のうち、とくに日用品や食料品小売業に携わる者が多く、次いで手工業の順となっている。また明治前期までにみられた多数の古物小売業者（第 3 表）は、うかがえない。練羊羹製造をしている⑤や桶輪替をしている⑭は、自らその小売もしている。このように、手工業に携わる者が存在する一方で、⑥や20のように専業で携わる者も存在する。

明治前期に多くみられた古物小売業（第 3 表）は、後期では 3 名となっている。⑬は古着や古道具、古書画などを扱っている。このうち古着については、コレラの流行により明治 19（1886）年に大阪府下でその輸送が禁止[24]されたことから、少なくとも古着の売買は抑制されていたであろう。このほか、明治前期に存在した人力車夫や髪結業者はみられない。

また、先述の天保期より存在する者（B）の

第4表　明治後期における旧岡村の諸営業形態

番号	営業人名	商店名（屋号）	A	B	C	業種					
						日	食	工	古	衣	卸
①	—	布甚米屋		○			●				
2	下村楢吉	下村商店	○			◎				◎	
3	阪本茂平	団扇屋		○		不明					
4	狩野たつ	紙佐店			○						●
⑤	田中	田中呼人堂	○				◎	◎			
⑥	前川熊吉	紺熊			○			○			
⑦	不明	古物屋（仮称）	不明						○		
⑧	西崎政吉	はんどや		○＊		○					
9	角野子三吉	—	○				●				
10	田中末益	大末事・田中末益	○			◎	◎				
11	山下又吉	松新事・山下又吉	○			◎					
12	角野政吉	正埼堂	○			◎					
⑬	角野長次郎	角野浄土堂		○			●		●		
⑭	吉村卯之吉？	—		○＊		●		●			
⑮	阪本平三郎	—		○						●	
16	玉井丑松	茜又？		○＊			●				
⑰	井口フサ	井口商店	○			◎	◎				
⑱	宮田卯吉	雅采堂	○						◎		
⑲	藤田六三郎	綛六		○		●					
20	日野丑松	—	○					○			
21	八尾石次郎	八尾石			○	●					
22	田中為蔵	八幡屋商店			○	◎	◎				
㉓	矢尾甚之助	河州出店事・矢尾商店	○				◎				
計			10	8	4	10	9	4	3	2	1

A：当期に初出　B：天保期より存在（＊印：代替わりが発生していると考えられる者）
C：天保期に存在したが当期に初出
業種における日：日用品小売業（小間物・荒物など）　食：食料品小売業（米・醤油など）
工：手工業（練羊羹製造・染物など）　古：古物小売業（古道具など）
衣：衣料品小売業（綿・メリヤスなど）　卸：卸売業（鮮魚）
○印：史料　◎印：引札・暦　●印：聞き取りによる
注）表中の番号は第3図に対応する。また□印に示される者の営業地は不確かである。
（17）における史料⑬～⑮および聞き取り調査をもとに作成）

8名のうち半数の営業種数は、明治前期に比べ減少している。また転業したと考えられる者は、①と⑧の2名である。たとえば、当期に食品小売業に携わっている⑧は、明治前期においてはそれ以外の業種に携わっていた（第3表）。また、明治前期と営業種に変更がみられないのは⑮の1名のみである。なかでも、代替わりが発生したと考えられる3名（⑧・⑭・16）については、明治前期の営業形態を踏襲していない。さらに、明治後期に初

出の者（A）は引札や暦といった広告媒体で確認されることがほとんどである[25]が、(B)についてはその例はない。また、第4表における⑲を除く7名の営業地は、明治前期と同様である（第2・3図）。

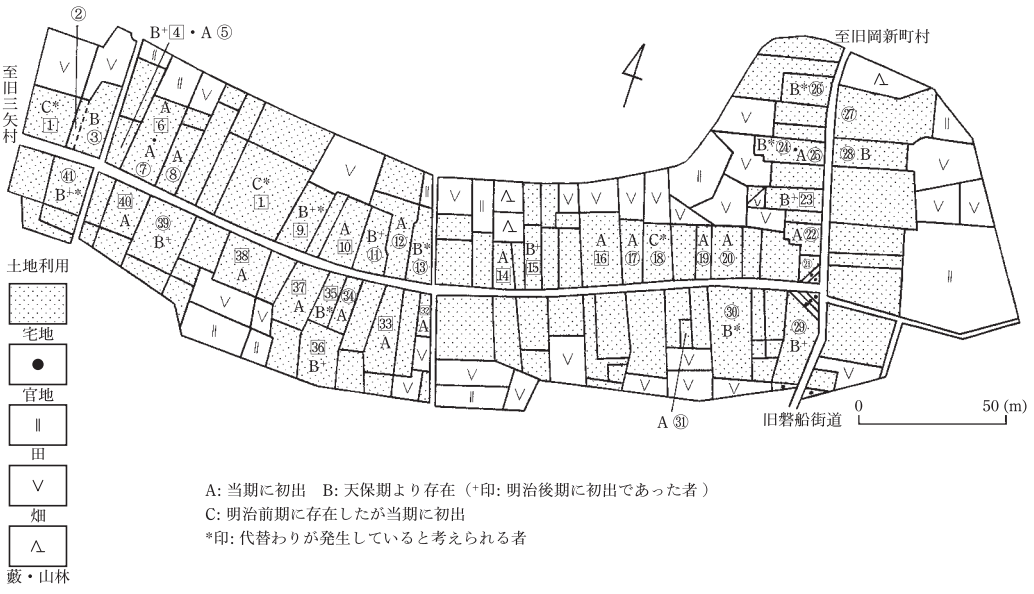
以上から、当期においては商人の営業種は特定の業種に収斂する傾向がみられた。なかでも、日用品や食料品に着目する商人が多くみられた。これは、代替わりを含む既存の商人についても同様のことがいえる。同時に、社会経済的背景のもとに旧来の営業形態から離れる様子がみられた。それは初出の商人の営業形態にあらわれている。

Ⅳ. 大正～昭和初期にかけての旧岡村の変容

1. 旧岡村の諸営業形態

大正3（1914）年、旧枚方村から旧岡村に枚方町役場が移転した（第1表）。この頃から、枚方町各地においても近代的な設備を備えた工場の建設が進められた。大正9（1920）年には、旧岡村において日本メリヤス株式会社枚方工場が操業を開始した[26]。また、淀川の対岸にある摂津・三島方面との唯一の交通手段であった渡船は、昭和5（1930）年における枚方大橋の開通により、一部姿を消した[27]。これにより、枚方大橋は淀川両岸を結ぶ大動脈の役割を果たすことになった[28]。また同年には、旧岡村に蔬菜や果樹取引のための枚方東口市場が落成した[29]。

第4図は、大正～昭和初期における旧岡村



第4図　大正～昭和初期における旧岡村の商人分布

注）図中の番号は第5表に対応する。また□印に表示される者の営業地は不確かである。

（17）における史料②～⑥・⑬～⑮および聞き取り調査をもとに作成）

第5表　大正～昭和初期における旧岡村の諸営業形態

番号	営業人名	商店名（屋号）	A	B	C	業種					
						日	食	工	他	卸	衣
1	林　利一郎	林香梅酢			○＊		●	●		●	
②	不明	メリヤス衣料品店（仮称）		不明							○
③	—	布甚米屋		○			●				
4	下村楢吉	下村商店		○＋		◎					◎
⑤	井口	井口助産所	○						○		
6	有岡徳次郎	—	○			不明					
⑦	下邨陽之助	下邨医院	○						○		
⑧	阪本喜代子	阪本京人形	○					●		●	
9	狩野巳之助	紙佐店		○＋＊						●	
10	西村浅吉？	西村大工	○					○			
⑪	田中	田中呼人堂		○＋			◎	◎			
⑫	北村	北村味噌	○					●		○	
⑬	西崎次三郎	はんどや		○＊		○					
14	平田	平田建具店	○			○					
15	角野子三吉	—		○＋			●				
16	佐々木	佐々木牛肉店	○				○				
⑰	藤田佐一郎	藤田時計店	○			○					
⑱	田中修次	タルサ下駄店			○＊	○					
⑲	前川丑太郎	魚丑	○				○				
⑳	岸上	日之出屋	○			●					
㉑	不明	モルガン靴		不明		●					
㉒	寺嶋	寺嶋八百屋	○				●				
23	角野政吉	正埼堂		○＋		●					
㉔	角野ふじ？	角野浄土堂		○＊			●				
㉕	井川	井川助産所	○						●		
㉖	吉村喜一郎？	—		○＊				●			
㉗	不明	とらや		不明			●				
㉘	玉井丑松	玉井トウフ店		○			●				
㉙	井口フサ	井口米屋		○＋			○				
㉚	藤田六郎治	藤田商店		○＊		●					
㉛	前川	前川印刷	○					○			
32	辻	辻散髪	○						○		
33	松井康造？	松井金物店	○			○					
㉞	大路甚太郎	大路雑貨	○			○					
35	日野利三郎	日野畳店		○＊		○					
36	八尾石次郎	八尾石		○＋		●					
37	北川	—	○			不明					
38	田中	田中金物	○			○					
㊴	田中	八幡屋商店		○＋			●				
40	林　利吉	林材木店	○			○					
㊶	矢尾甚治郎	河州出店事・矢尾商店		○＋＊			○				
計			20	16	2	15	13	7	4	4	2

A：当期に初出　B：天保期より存在（＋印：明治後期に初出であった者）
C：明治前期に存在したが当期に初出
＊印：代替わりが発生していると考えられる者
業種における日：日用品小売業（小間物・荒物など）　食：食料品小売業（米・醤油など）
工：手工業（酢醸造・味噌醸造など）　他：その他（医院・理髪など）
卸：卸売業（鮮魚・味噌など）　衣：衣料品小売業（綿・メリヤスなど）
○印：史料　◎印：引札・暦　●印：聞き取りによる
注）表中の番号は第4図に対応する。また□印に示される者の営業地は不確かである。
（17）における史料⑬～⑮および聞き取り調査をもとに作成）

の景観復原図である。明治後期に比べ、宅地は若干増加している。商人は、やや旧三矢村側に多くみられるものの、全体的に密になり、41 名の商人がみられる（第 5 表）。これらの構成をみると、当期に初出の商人（A）は 20 名、代替わりを含む既存の商人（B）は 16 名となっている。また[1]や⑱のように、明治前期に先代が同様の業種に携わっていたものの、当期において初出の商人（C）が存在する。B については、天保期より既存の者（6 名）および明治後期に初めて確認された者（9 名）に大別される。

当期では、医院業や理髪業などの新たな業種や卸売業がみられる。日用品ならびに食料品小売業に携わる者は相変わらず多くを占め、当期においてはこの 2 業種に収斂されている様子が明らかである。また、古物小売業が衰退したため、その業種に携わる者は皆無となった。

明治後期には 1 ～ 2 業種に携わる者が多くみられたが、当期では[1]のように 3 業種に携わる者も存在する（第 5 表）ものの、1 業種のみに携わる者が大半となっている。これは明治後期以降、商人による業種の選択がなされたと考えられる。またその内容は、日用品あるいは食料品小売業がほとんどを占めている。たとえば明治後期に日用品ならびに食料品小売業に携わっていた⑰（第 4 表）は、当期には食料品小売業のみに携わっている（第 5 表）。このように、史料の制約ならびに性格はあるものの、特定の業種を商人は選択したと解せよう。

また手工業には 7 名が携わっている。このうち[1]は、旧岡村において酢醸造の工場を店舗とは別に構え、旧三矢村にも店舗を構えていたようである[30]。一方、味噌醸造に携わっていた⑫は大阪の樽屋橋（現・大阪市北区）にも醸造工場を構えており、また他の商店へも味噌を卸していた[31]。このことからも、比較的規模の大きな店舗が当期の旧岡村にあらわれたのである。

2. 岡村における商人の営業種の収斂

第 5 表における[4]や⑪、[23]の携わる業種は、明治後期と比べ変わっていない（第 4 表）。このような者はほかに 3 名存在する（[15]・㉔・㊶）。これらより、彼らは業種の固定化を図っているものと考えられる。また彼ら 6 名の営業地（第 3・4 図）も移動していないと思われることから、もとより経営基盤となる業種を定め、それを専業としていく過程がうかがえる。

一方、天保期から大正～昭和初期においても諸営業に携わっている者をみると、第 5 表の③や⑬、㉔のほか㉖、㉚の 5 名が該当する。このうち第 3 表における[21]は、当初日用品小売業・手工業、そして「その他」の業種の 3 業種に携わっていた。その後、明治後期には⑭へ営業人が代わると（第 4 表）、前者 2 業種となった。そして大正～昭和初期に㉖へ代わると（第 5 表）、手工業のみに携わっている。第 5 表における他の 4 名についても、営業種は異なるものの、特定の単一業種に携わるようになり、彼らの営業地も明治前期以降ほとんど変わっていないと推察される（第 2・4・5 図）。つまり、商人は当初複数の業種に携わり、思案しながら経営基盤を確立させていく過程がうかがえるのである。

このように、京阪枚方東口駅の開設後の旧岡村においては、新たに参入してきた商人の存在がうかがえた。また、大正～昭和初期における旧岡村の東側においては、西側に比べ

店舗を構える商人は少なくなった（第4図）。そのなかで、業種の収斂がより進展したことが当期の特徴である。

V．おわりに

本稿では、旧京街道枚方宿の岡村を例に、旧宿場町の変容を諸営業形態から考察した。枚方宿は、これまで宿駅機能の喪失とともに衰退したと捉えられがちであった。しかし、4か村で構成される同宿のうち、岡村という1か村にとくに焦点をあてると、衰退したとは言い難かった。岡村では、宿駅制度廃止以降、旧京街道筋において時期を経るごとに宅地の増加がみられた。また、新規の商人も多くみられた。そして、代替わりが生じつつも商人の営業種は、複数の営業種から日用品あるいは食料品小売業へとしだいに収斂していった。

これまでの歴史地理学研究では交通手段の変化、とくに鉄道の発達が宿場町の衰退を招いたと考えられてきた。しかし、この岡村は、京阪枚方東口駅の開設による地域の衰退をみなかった。それは、同駅開設後の商人の数およびその内訳（A～C）からいえる（第5表）。従来の研究においては、宿場町は宿駅機能を抱える交通集落であると捉えられがちであった。しかし、旧宿場町のうち1か村に目を向けると、元来有していた藩制村の特徴を維持している例がみられた。旧枚方宿のひとつである岡村の場合、近代では流通機能、とくに諸商人による流通活動が絶えず行われていたのである。

本稿のように、多村からなる宿場町について、明治期以降にその集落そのものが衰退したか否かは、個々の地域について詳述する必要がある[32)]。ただし、一村一宿型であった宿場町について同様のことがいえるか否かは、今後の課題としたい。

〔付記〕本稿は、2003年12月に立命館大学文学部地理学科に提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものです。史料の収集や閲覧に際しては、枚方市在住で近世交通史家の中島三佳氏をはじめ、阪本千秋氏、中島正雄氏、藤田二郎氏、財団法人枚方市文化財研究調査会、枚方市教育委員会社会教育課、枚方市総務部法制室（現・枚方市立中央図書館市史資料室）、枚方市財務部税務室資産税課、大阪法務局枚方出張所などの方々にお世話になりました。聞き取り調査では、現地の方々に貴重なご意見・ご協力を賜りました。また、高校時代の恩師である河尻　正先生（現・大阪国際大学）には多くのご助言をいただきました。卒業論文作成ならびに本稿への改稿・修正に際しては、3・4回生のゼミでお世話になった河原典史先生と、卒業論文口頭試問で河島一仁先生に色々とご指導をいただきました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。

注

1）近世の宿場町は、その起立の際の基盤に着目すると以下の4つに類型化される。①一村一宿（集落）型、②一村多宿（集落）型、③多村一宿（集落）型、④多村多宿（集落）型。土田良一『近世宿駅の歴史地理学的研究』、吉川弘文館、1994、108頁。

2）歴史学的研究としては、以下の論考がある。髙瀬　保「加賀藩の宿駅制度の崩壊―越中河西地方について―」、地方史研究 20-2、1970、17～36頁。竜野敬一郎「近世宿駅構造の変遷―信濃国小県郡長久保宿の場合―」、信濃 28-7、1976、50～68頁。また地理学的研究としては以下の論考がある。前田和夫「伊勢参宮街道筋の青山峠の対向集落の変貌―交通変遷による影響―」、人文地理 14-3、1962、89～94頁。土田良一「上諏訪宿の困窮過程と地域構造―伝馬役助成としての問屋口銭―」、歴史地理学紀要 19、1977、161～181頁。浅香幸雄「近世末における越中西部上使街道（脇街道）中田宿の戸口分析」、歴史地理学紀要19、1977、183～213頁。

3）近世における江戸幕府の全国的な交通政策の実施により設けられた各宿場町に対する機能。

参勤交代など公用通行の貨客に対する人馬の継立（問屋場で行われる）や、諸侯・一般通行客に対する休憩所・宿泊施設（本陣・脇本陣・旅籠屋などの旅宿）の設備が挙げられる。

4）比留木広明・桑原公徳「明治期の宿場町―暗越奈良街道松原宿の場合」、（桑原公徳編『歴史景観の復原―地籍図利用の歴史地理―』、古今書院、1992、所収）、233 ～ 251 頁。

5）朝比奈太郎「宿場町―東海道舞坂宿の場合」、（桑原公徳編『歴史景観の復原―地籍図利用の歴史地理―』、古今書院、1992、所収）、169 頁。

6）児玉幸多編『日本交通史』、吉川弘文館、1992、229 ～ 230 頁。ここでは流通機能の中心は六斎市ととらえられているが、本研究においては近郷の市場的なものとする。

7）ここでは、商人の営業種の内容やその動向を示す。業種については、日用品小売業・食料品小売業・衣料品小売業・古物小売業・仲買業・卸売業・手工業（職工含む）・宿泊施設業・漁業・その他（人力車夫・髪結業など）に区分する。なお仲買業については、幕末期から明治維新期にかけて問屋との区別が乱れ、卸売業の範疇が生まれたが、いずれの業種についても、各史料の記載内容に基づき区分する。動向については、兼業の有無や転業、代替わりについて考察を加える。このとき、農業との兼業については考えないものとする。

8）京都―大阪間に整備された街道。東海道枚方宿とする例もみられるが、ここでは京街道枚方宿とする。

9）田宮久史『東海道枚方宿』、枚方市教育委員会、2001、18 頁。

10）黒羽兵治郎「枚方宿と助郷制度」、（寺嶋宗一郎編『枚方市史』、枚方市役所、1951、所収）、660 ～ 676 頁。

11）福山　昭・山口尚子「近世枚方宿と飯盛女」、枚方市史研究紀要 8、1975、1 ～ 51 頁。

12）中島三佳「文政十三年のお蔭踊りについて―東海道枚方宿を中心に―」、地方史研究 168、1980、1 ～ 20 頁。

13）屋久健二「近世後期枚方宿の旅籠屋と飯盛女」、年報都市史研究 7、1999、117 ～ 132 頁。

14）矢内　昭「地籍図等を活用した宿場町の復原―東海道枚方宿・守口宿の場合―」、地理 28-7、1983、26 ～ 36 頁。

15）おもに中島三佳『宿場町枚方とくらわんか』、自費出版、1982、7 ～ 8 頁に示された「東海道枚方宿復元図（天保期）」による。この復元図においては、京街道筋における宿役人名および旅籠屋・船宿が記されている。屋号で営業人名を判断せざるを得ない点や、営業種が宿泊施設業のみで業種の多様性がみられない点から、聞き取り調査をふまえたものである。

16）前掲 9）、114 頁。

17）①「明治初年・岡村地図（仮称）」昭和 59 年 6 月（原本は推定明治 7 ～ 13 年頃）②「大阪府下河内国茨田郡岡郷切図」明治 19 年 10 月　阪本家文書その 1、67 号（枚方市立中央図書館市史資料室架蔵マイクロフィルム）および藤田氏所蔵文書 ③「土地台帳附属地図（複写）枚方市 No. 3字字山　No. 4字岡」のうちNo. 4　平成3年作成（原本は明治 19 年 10 月）大阪法務局枚方出張所蔵 ④「枚方市土地台帳附属地図大字岡」作成年次不明　枚方市財務部税務室資産税課蔵 ⑤「北河内郡枚方町全図」大正 9 年 7 月作成個人蔵 ⑥「茨田郡牧方町大字岡　旧土地台帳」全 8 冊のうち（33）・（34）明治 23 年 1 月　大阪法務局枚方出張所蔵 ⑦「岡村諸営業願書控」明治 9 年 12 月　阪本家文書（『枚方市史』第 11 巻 271 頁）⑧「岡村営業人名記」明治 10 年 5 月　阪本家文書（『枚方市史』第 11 巻 278 頁）⑨「諸営業税金取集帳」明治 13 年 5 月　阪本家文書その 4、43 号（枚方市立中央図書館市史資料室架蔵マイクロフィルム）⑩「営業願並ニ鑑札書換願」中島義彦家文書その 1、815 号（枚方市立中央図書館市史資料室架蔵マイクロフィルム）のうち（a）「廃業御届」明治 15 年（b）「売薬請売願」明治 16 年 7 月（c）「御鑑札書換願」明治 17 年 6 月 ⑪「壱ヶ年売金」明治 16 年 7 月　阪本家文書その 1、225 号（枚方市立中央図書館市史資料室架蔵マイクロフィルム）⑫「岡村古商人名等取調書」明治 17 年 1 月　阪本家文書（『枚方市史』第 11 巻 285 頁）⑬「旧岡村の伝承史料 1」私家版　昭和 50 年代作成⑭『枚方市建造物調査報告Ⅰ　旧枚方宿の町家』、枚方市教育委員会、1987 ⑮藤本　毅『明治のチラシ広告　大阪・枚方の引札―池田屋コレクション』、東方出版、1990。なお、史料⑩における（a）～（c）については筆者が分類上便宜的に付与した。

18）ここでは、商人の営業地は、おもに旧土地台帳で土地所有者が確認できる位置であるとみなす。ただし、明治前期については、旧京街道筋における大まかな地目とそれらに付記された氏名により判断する（前掲 17）①）。また自家あるいは借家の区別については行わないものとする。なお、商人が既存か初出であるかについても考察を加える。ここでいう初出とは、各史料や聞き取り調査により、①～③の各時期において筆者が初めて確認したことを意味する。代替わりについては、聞き取り調査により確認できたものと、そうでない場合は、おもに旧土地台帳に記された各土地の所有者の変化に着目したところが大きい（前掲 17）④）。

19）上堀与平により設立され、本社は岡新町村に

おかれた。枚方市史編纂委員会編『枚方市史』、第4巻、枚方市、1980、267頁。
20）前掲19）、267頁。
21）前掲17）①には推定明治7～13年頃の地目がおおまかに記されている。後の前掲17）②や同③を照合すると、おおよその地目が判定できるが、ここでは宅地以外は不明とした。
22）前掲17）⑩-(c)。
23）なお本稿では、町村合併以降の旧枚方宿4か村について、とくに注記しない限り大字名ではなく旧村名で記すことにする。これは、あくまで表記に統一性をもたせるためである。
24）枚方市史編纂委員会編『朝日新聞記事集成』、第1集、枚方市、1974、108頁。
25）前掲17）⑮。
26）経営不振のため、大正13（1918）年に倉敷紡績株式会社に買収された。前掲19）、465頁。
27）大塚の渡し（枚方の渡し）と新地渡しが該当する。枚方市史編纂委員会編『枚方市史』、別巻、枚方市、1995、501頁。
28）前掲19）、602～603頁。
29）枚方市史編纂委員会編『朝日新聞記事集成』、第7集、枚方市、1980、102頁。
30）聞き取り調査による。
31）財団法人枚方市文化財研究調査会編『枚方市文化財年報』、16（1994年度分）、財団法人枚方市文化財研究調査会、1996、74～76頁。
32）これに関して黒崎千晴は、「宿駅がおかれていた市街地には、近郷市場というべき性格も付与されていたから、かような交通面での機能が失われた、ということだけが、変貌化のすべての要因、ということにはなるまい」とし、「かかる集落が別個の生産活動をも有していたか否かという側面も、変貌化の方向決定に、大きく併用するとしてよかろう」と述べている。黒崎千晴「宿場町の変貌―その追求手段を中心として―」、地理13-11、1968、24頁。